みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

布の人類学に向けて＜共同研究：伝統染織品の生産と消費：文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2023-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中谷, 文美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000012

布の人類学に向けて

中谷 文美

手と機械

A：この村では、全部手。手（で）、作ります。手でもきれい。機械みたいにきれい。

B：手が、きれいなんですよ。手で作っているから。機械だったらきれいじゃない。

日本語でのこの会話は、2000年12月に私が東北タイのある村で耳にしたものである。会話の主は、現地のNGO職員であるタイ人女性（A）と、ある教育研修のスタッフとして、私とともにその村に短期間滞在することになった日本人女性（B）である。カンボジアとの国境近くに位置するこの村では、多くの女性が農閑期を中心に絹の絣生産を手がけていた。

「手で作ったからこそ、きれいなのだ」と主張するBは、審美的な美しさだけを問題にしているのではない。ここでいう「きれい」は、むしろ「本物らしさ」や「真正性」と訳されることの多いオーセンティシティという概念に通底するものであろう。実際、彼女が別の機会に町で見かけた布の場合、手織りにしてはきれいすぎると思ったら、店員から機械で織ったものと教えられたという。機械織りの布の織り目が揃って美しかったとしても、手仕事が持つ美しさにはかなわないとBは感じたのである。

他方、現地女性のAも、自分の村で織られている手織り布の価値を否定しているわけではない。むしろ、機械による精巧さに比べて劣ると思われがちな手作業であっても、十分にすばらしい成果が生み出せることを誇りに思うという意図の発言であったと思われる。

当時のこの村には、蚕を飼い、繭から糸を挽いて天然染料で染め、絣括（かすりくく）りから織りまですべて1人でこなす人がいる一方で、仲買人から渡された工場製糸や合成染料で注文通りの製品を作り、出来高払いの賃金を受け取る人もいた。この地域で市場向けに織られた布は、仲買人の手で域外に運ばれ、近隣都市の土産物店ばかりでなく、首都バンコクの工芸品店、空港の免税品店にも並んでいた。

もともと人が手で作った美しい工芸品に惹かれ、誰が作ったのかわかるようなものが買いたいと言っていた上記のBは、近くの町の絹織物販売店で見つけた総柄の絣布の製作者を村で探し出した。購入した布の織り手を訪ねることができた上に、その人の名前を布に縫い取ってもらったらしい。生産者と消費者の空間的・文化的隔たりを超え、一期一会の出会いを実現できたという意味で彼女は幸運な消費者といえる。

文化横断的消費のなかの伝統染織

2000年当時、日本では「アジアン雑貨」の範疇に入る東南アジア産の手工芸品が人気を集め、雑誌などで頻繁に特集が組まれたほか、各地の百貨店やギャラリーで展示即売会が開かれていた。それらの雑誌記事や通販サイト、店頭で強調されていたのは、扱われるモノ本来の文化的・社会的文脈であり、そこに連なる物語であった（中谷 2005）。実際に生産現場に足を運ぶことがかなわない大多数の消費者にとって、これらの産地情報は断片的であってもモノの背景を知る重要な手立てであり、購買欲をかき立てられる要素でもあった。

冒頭のやりとりがいまだに私の記憶に刻まれているのは、手で作ることと機械で作ることの対比をめぐって、2人の間にささやかな認識の齟齬があるように見えることそれ自体が、「文化横断的消費」（Howes 1996）の特質を端的に示すと感じたためである。グローバル化の加速を背景に国や文化の境界を越えたモノの移動が常態化するなか、消費者と生産者の空間的隔たりは拡大した。だがバナナやコーヒーといった商品作物と異なり、伝統染織を含む手工芸品の場合は、上記のように、特定のモノの文化的背景を知ることこそがそのモノに付与される価値を増すことにつながる。これが文化横断的消費の特徴である。

本共同研究でも、ローカルな生活世界において一定の社会的・文化的意味と機能を持ち、使用されてきた伝統染織品が商品化され、従来の生産と使用の文脈を離れた市場に流通するようになった過程を考察対象とした。とくに、ローカルな

腰機を使って織られている紋織の意匠をミシン刺繍で再現した布（2018年8月、インドネシア・バリ州、中谷文美撮影）

米の天日干しをしながら刺繍をするミャオ族女性（2010年12月、中国・貴州省、佐藤若菜撮影）

文脈に根付いた文化実践を国単位のものとしてグローバルな文脈に引き上げ、可視化する無形文化遺産の認定や、商品としての販路開発と結びつくと同時に外部者からの評価を強化する観光化が、アジア地域を中心とする各地の伝統染織品の生産と消費にどのような効果や影響をもたらすのかという点を議論の軸に置いてきた。

単線的ではない変化

研究会では個別事例の研究成果を報告しあうとともに、特別講師の招聘や館外での研究会を通じて特定の布の生産・流通現場の知見を共有することにより、各自の調査地で生じている変化の意味を考え、言語化する作業を行った。共同研究期間の後半には、「ファッションショー」「伝統として残す素材・技術・道具」「プリント技術とオーセンティシティ」「手仕事と機械」「〈他者の布〉とコレクション」「着物の生産・流通・消費システム」の6つのテーマに絞った集中討議を実施した。並行して、「モノがたり」シリーズと題し、各メンバーが調査地との長期にわたるかかわりのなかで入手した布製品の現物を提示しつつ、生産現場に生じたさまざまな変化を説明するセッションを行った。

これらの議論を通じて浮かび上がってきた論点のうち、代表的なものは以下の通りである。

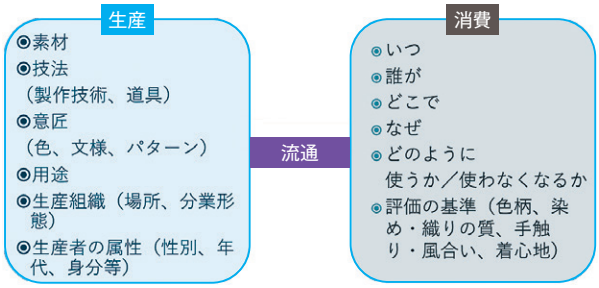
1）布の物質的特性とグローバルな市場展開

地域や文化の境界を超えて流通する生産物はほかにも無数にあるが、布の物質的特性は、その素材や技法の多様性と分かち難く結びついている。素材調達の範囲や製作技術の進化により生産物の多様性はさらに増大し、また消費者の広域化・多様化といった現象も生じた。だからこそ、グローバルな市場展開においては、個別の布の背景にまつわる情報や物語が価値を持つことになる。

2）素材・道具・技術の継承

布生産の持続性を考える上で重要な要因の1つに、素材へのアクセスを可能にする広義の環境（森林などの植生、集落の人間関係など）がある。また、ローカルに継承される技術と外部から評価される技術に乖離がみられる場合もある。とくに文化遺産化や観光化の進展のもとで、政治的・経済的要

中谷 文美（なかたに あやみ）
岡山大学文明動態学研究所教授。専門は文化人類学、ジェンダー論。著書に『「女の仕事」のエスノグラフィ―バリ島の布・儀礼・ジェンダー』（世界思想社 2003年）、編著に『仕事の人類学―労働中心主義の向こうへ』（共編 世界思想社 2016年）、*Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*.（Lexington Books 2020）などがある。



伝統染織品の生産と消費を分析する項目例（筆者作成）

因に加え、グローバル消費者の動向が継承すべき素材・技術の選別を左右する状況が広がっている。

3）プリント技術の功罪

布の使い手・用途に変化が生じると同時に、作り手自身の身体や生活環境も変化するなかで、文様の複製により布の大量生産を可能にするプリント技術は、在来技術による拘束からの解放を意味しうる。また廉価品の普及により、それまではある種の威信財として社会の上層の人びとが独占していた布や衣類をより多くの人が入手できるようになることもある。他方、「プリント化」は技法の固有性を度外視して特定の布に表現される色や文様などの意匠だけが取り出され、前景化される現象をもたらすものである。誰がどのような文脈でプリント化を受け入れ、また拒絶するのかを検討することで、伝統染織の生産・流通・消費にかかわる多様なアクターの相互作用を見通すことが可能になる。

上の図にも示したように、布の生産には、素材や技法、意匠に加え、用途、生産組織、生産者の属性をめぐってじつに多様な要素がかかわっており、また消費についても考えるべきポイントが多い。

伝統染織と位置づけられる布は、どの社会においてもさまざまな変化をくぐってきた。本共同研究では、その変化の過程において、具体的にどの部分がどう変わり、逆にどの部分が変わらなかったのかを個別事例を通して比較・検討することにより、それらの変化がけっして一方向に進んできたわけではないことを確認した。加えて、布の物質性が持つ意味を改めて考えることで、ほかの工芸品とは異なる布ならではの特徴を浮かび上がらせることができた。

引用文献

中谷文美 2005「日本の中のアジア、アジアの中／外の日本―『手仕事』の文化横断的消費をめぐって」『文化共生学研究』3(1): 103-118。
Howes, D. 1996 *Cross-Cultural Consumption: Global Markets, Local Realities*. London and New York: Routledge.